

二通 諭 (著)

映画で学ぶ特別支援教育

高橋正雄 (筑波大学人間系)

本書は、15年にわたって総合リハビリテーション誌上に「映画に見るリハビリテーション」を連載している二通諭氏が、特別支援教育という視点から、近年の映画に描かれた障害ならびに障害のある人々を論じた作品である。本書の目次を見ると、ADHD、アスペルガー症候群、自閉症、人格障害、児童虐待、不登校などの言葉が並んでいて、特別支援教育と言っても、本書が最近話題の発達障害に焦点を当てたものであることがわかる。それは、著者自身の関心ということもあるが、おそらくは発達障害に対する社会全体の関心の高まりを反映して、そうした問題を扱う映画が多くなったということなのであって、その意味でも本書は時代のニーズに即した内容になっている。

個々の映画をリハビリテーション的な観点から論ずるということは、氏がかねてより本誌上で試みてきたことであるが、本書の魅力はそれにとどまらず、時代精神のようなものに対する氏の鋭い洞察が語られていることである。たとえば、「補章1 映画の中の障害者像」には、「1990年代は障害者映画の時代でした」という書き出しの文章をはじめ、「障害に内面形成上の意味を与えたという点で本作(1991年「心の旅」)は際立っていましたが、これこそ1990年代の障害者映画群に通底する特徴なのです」、「障害者の権利を守り発展させてきた成果が、1990年代のエイズ患者の権利を支え、救済したという物語であり(1994年「フィラデルフィア」)、障害者の権利擁護の運動は当事者のためだけではなく、近未来人をも助ける性格をもっているということがよくわかります」、「2000年代に入ってからは、映画も特別支援時代へと移行し、発達障害や精神障害についての描き分けもいねいになってきました」などの文章があって、二通氏が個別事例的に映画を論じるだけでなく、時代的な背景や社会的な文脈のなかで各々の映画が有する意味についても考えていることがわかる。

その他にも本書には、二通節とでも呼ぶべき氏の実践的な英知を背景にした文章が溢れている。特に、「平野さんの実践は、生徒の今の状況を否定しないところに真骨頂(本質)があります。教室に入らず職員室のソファでゴロゴロしていても、とりあえず登校しているだけでもありがたいと感じています」(2010年「月明かりの下で」)、「人の気持ちをキャッチすることが苦手なはずの自閉症者ですが、その一方、実はキャッチしようと努力しているのだと内面世界を歌い上げているのです」(2009年「ぼくはうみがみたくなりました」)、「被虐待経験は反社会的な行動につながるという、ちまた囁かれている「宿命論」に抗して、なんとか自分を立て直し、正義と愛を貫こうとするユウのような人物を対置させたという点が新鮮です」(2009年「愛のむきだし」)、「自分をダメな人間だと思いこんでいた大介ですが、それは家庭や学校という狭い世界でのことです。一歩外に出ると、こんな自分にも援助を求めてくるほどの、さまざまな困難を抱えた人たちがいるのです」(2000年「十五才 学校Ⅳ」)などは、そのままどこかで引用させていただきたくなるような文章である。

いずれにしても本書を読んでいると、特別支援教育の対象とされている子どもたちがいとおしくもたくましい存在に思えてくるが、それはとりもなおさず氏の子どもたちを見るまなざしの反映であろう。無論そこには、2005年に発表された「マラソン」を論じて、「ハッピーエンドに収まりきらない厳しい日常の描写こそ本作の真骨頂である」と結論するような、氏のリアリストとしての現実認識が込められているのであって、実は本書ではそうした認識の背後にある氏自身の幼少期の痛切な体験も語られているのだが、それがいかなるものであるかは、読者自らが本書を手にとって確認されることをお勧めする。(A5判 144頁 定価 1,700円+税 全障研出版部刊 2011)